

昼。

泥のような眠り。そう表現するのが相応しい眠りの中に私はいた。

時計が朝を告げた頃、私は一旦目覚めていた。しかし窓を濡らす雨滴と、窓硝子を通してさえ強く響く雨音を聞き、私は再びベッドの中に潜り込み、そして再び眠りに浸ったのだ。

そんな不自然な眠りの中で、私は淫夢をみる。

二匹の白い蛇にその姿を変えた彰子と雅美が、私の身体に巻付き、細く長い舌で陰茎を舐め、そして身体が震えるほどに強い快感の中で、私が放った精液を舐め取る。

二匹の蛇はそれでも一向に満足する気配を見せず、私を苛みつづけ、そして快楽に痺れさす。私は、その二匹の蛇が尽きることなく私の身体に与える快楽を恐れ、そして楽しみ、溺れる。

私は既に苦痛としか感じられない程に、何度も精を放ち、その苦痛と快楽に身を悶えさせる。そして私は、その快楽と苦痛との狭間で私と、二匹の蛇の淫らな営みを見詰める黒猫の姿を見る。

黒猫、エンブーサは私達のその背德的な行為を、感情の無い銀盤のような瞳で見詰め、そして漆黒のなめらかな毛皮に覆われた赤い、真つ赤な口を開き、嘲笑する。

私はうめき声を上げ、そして再び夢の中で射精の苦痛と快楽を味わい、ベッドから身を起す。ベッドに座った私は、雨滴が流れる窓を見る。暗く、まるで夕方のような明るさしかない部屋の中を見回し、時計で時間を知る。

昼食の時間が過去っていた。

ベッドから抜け出すと、微かに昨夜の疲労が下腹部にわだかまっている事に気付く。今の夢のせいだろうか。

私は昨夜の居間での事を思い返す。雅美を鞭打ち、苛み、尻を抱いた事を。彰子が、自らの秘部に淫具で行った淫らな行為を、そして二人の女の背德的で蠱惑的な味わいを、嗜虐の快楽を。

ふと机の上に目をやると、一振りの鞭がそこに置かれていた。私はその鞭を見詰めたまま、一瞬身体を凍り付かせる。それはまぎれもなく昨夜私が、雅美の尻を打ったあの鞭であった。

私が鞭を持ち帰ったのだろうか？ それとも？

その場に立ったまま、机の上に置かれた鞭を見詰めつづける私の心の中に、何者かの声が囁きかける。

お前の鞭打った雅美の尻は今、どんな事になっていると思う？ 傷つき、熱く腫れ上り……そして今も又、お前の振るう鞭を待っているんだ。

お前が犯した雅美の尻は今、どうなっていると思う？ お前が針で刺し、固い一物を押し込み、擦り上げたんだ、腫れ上り、苦痛に疼いているはずだ。しかし、再びお前に犯される快樂と苦痛を今も又、待ち望んでいるんだ。

彰子が自分の手で、あの大きな作り物の陰茎を捻り込んだ陰部は今、どうなっていると思う？ 今もその時の苦痛と快樂を思い、蜜を吐いているんだ。お前が犯した彰子の尻はどうなっていると思う？

その私の心に囁きかける声は誰のものでもなく、私自身のものである事を私は知っていた。そしてその想像が、昨夜あの居間で目覚めた、私の心の奥底に潜む狂暴で肉欲に狂った獣の目を再び開かせるのだという事も。

私は、知らず知らずのうちに鞭を取ろうと伸ばしていた手を止める。一旦、その鞭を手に取ってしまえば、私の中の、その欲情が再び制御を失うだろう事を、私は自覚していた。

私は再びベッドに腰を下ろす。股間では陰茎が勃起していた。

昨夜飲んだカミュが、昨夜とは比較できない味の液体となつて喉にせり上がる。

彰子もまた、自分の部屋のベッドの上に横たわっていた。

まだ糊の張りが残るベッドシートの上に、薄く透けるような絹の寝間着だけを身に付け、目覚めと眠りとの中間の気だるさの中にいた。

彼女の身に付けている寝間着は、亡くなった夫が生前好んだものだった。その寝間着を彰子は昨夜、あの居間から戻つて来た時、久々に衣装戸棚から取り出し、身にまとつたのだった。

彼女は、何も見えていない目をぼんやりとカーテンが引かれた窓に向けている。

その瞳がふと輝きを増し、彼女の脳裏に昨夜の居間での出来事が浮ぶ。その途端、記憶が彼女の身体の中心部分から滲みだし、まるで湖面に投げ込まれた小石が作りだす波紋のように全身に広がって行く。

彰子は手を乳房に当て、撫で摩り、そして引き絞るかのように揉みはじめる。ぬめるような絹の生地の手触りの向こうに、横になったままでも形を保つ乳房の張り、じわりとそこから湧きあがってくる快感を感じる。

乳首が絹を押し上げ、脳裏に、手足を拘束され尻を鞭打たれていた雅美の姿が浮んだ。

なめらかなシートの上を太股がすべり、よじり合される。

——雅美の苦痛と快樂の悲鳴が脳裏に蘇る——手が下腹部に伸びる——針を打込まれ、血を流していた雅美の尻が浮ぶ——手が寝間着の裾の中に入る——雅美が性器に歯を立てられた時に張り上げた悲鳴が聞える——熱い内腿を指が探りはじめる——雅美が後孔に陰茎を受入れながら、

秘部から垂れ流していた愛液が浮ぶ——指が陰毛の奥に滑り込む——雅美の、陰茎が抜かれた後も口を開けたまま精液を垂れ流していた後孔が浮ぶ——指が陰核を探り当て、鈍い痛みと快感が走る——雅美のすすり泣く声が耳に蘇る——指先にぬめりを感じる。

彰子が息を微かに乱しはじめる。

ドアがノックされた。

「奥様……お言付けのお風呂の用意がととのいましたが……」

雅美の声であった。

彰子は溜め息のような息を吐き、股間をまさぐっていた手を寝間着の裾から抜き、ドア越しに雅美に声をかける。

「ありがとう……。すぐに行くわ」

返事を返し、立ち去ろうとする雅美の足音が聞える。昨夜の彼女の痴態が脳裏に再度去来する。中断された快楽が身体の中で蠢いた。

「待つて……雅美」

引き返してくる足音。

「はい……。なんでしょうか、奥様……」

不安気な声。

「私がお風呂に入ったら、あなたも来るの……よ」

「えっ……でも、昼食の用意が……」

「解った？ 雅美」

「はい……。解りました……」

立ち去る足音。

彰子がベッドから出る。微笑が口に浮び、舌が唇を舐める。

風呂場に向かう為に部屋のドアを開けた時、彰子はふと立ち止り、今、身に付けている寝間着を他のものに着替えようかと思うが、すぐに彼女はその考えを棄てた。



脱衣所にはバスローブと、その下に敷かれた下着類が用意されていた。

彰子は寝間着をすりと脱ぎ捨て裸になり、風呂場への戸を開ける。愛用の香水が香り、湯気が流れ出す。

湯船には、いつもの白濁した湯が張られていた。

軽く身体を流し、湯船の中に身を横たえた時、脱衣所に雅美が入ってくる音が聞こえてきた。そして、ドア越しのおずおずとした雅美の声。

「奥様……お言付け通りにまいりましたが……」

「脱いで、お入りなさい……」——彰子の手が、自分の肌の滑らかさを楽しむように胸を這い、乳房を握る——「早く」

湯船の中で横たわり、白濁した湯に浸りながら彰子は、風呂場の入口で立つ全裸の雅美を見詰める。

雅美は、彰子の目の粘りつくような視線を感じ、同性であるが故によりいつそうの恥ずかしさを覚え、思わず腕で胸と下腹部を隠した。

「手をどけなさい」

彰子が命じ、雅美が顔を背けながら腕で隠していた乳房と下腹部の陰りをあらわにする。

「後ろを向いて、昨日、あの人に責められたお尻がどうなっているか見せるのよ」

雅美は一瞬躊躇する。

昨夜、鞭と縫針での責めを受けた尻は、今朝から鈍く疼きつづけていた。経験から彼女は、自分の尻が今どんな状態になっているかを知っている、しかし、湯船から自分に向けられた彰子の自と、今の自分の置かれた状態を考え合えば、これからこの風呂場で行われるであろう事は容易に想像がついた。

無駄なのだ……。雅美は惨めさと諦めを覚え、彰子の言葉に従う。

しかし彼女は、彰子の視線を尻に感じながら同時に、自分の惨めな状態と、これから彰子が自分に行うだろう行為を思い、それを待ち望んでいるもう一人の自分が身体の内側に棲んでいる事も又、自覚していた。

彰子が、雅美の傷つき、所々に赤く腫れた箇所のある尻に視線を這わす。

「あの人はまだ起きて来ないわ……。貴方は昨日、そのお尻であの人の精を吸い取り、あの人を疲れさせ、誘惑したんだわ……。いけないお尻ね、私が罰を与えて上げるわ、あなたの淫らなお尻を罰してあげる……」

彰子のその言葉は、半ば自分に語りかけるように風呂場に響き、そして彼女は湯船の中で身を起す。

「そこに這いなさい、そこに這いつくばって、嫌らしいお尻を持ち上げるのよ」

雅美の、後ろを向いた肩が細かく震え、喉が嗚咽を鳴らすのが聞えた。その声を聞き彰子が更に興奮を高め、からかうような口調で言放つ。

「おや、嬉し泣きかい……。早くおし」

雅美は、背中を彰子に向けたまま冷たい洗場に這いつくばり、膝を立て、尻を彰子に向けて高く掲げてみせる。

彰子が期待に満ちた微笑みを浮べ、湯船から出る。風呂桶で湯を掬い取り、目の尻に浴びせかける。

突然の事に驚き、雅美が驚きの声を上げた。

「自分でお尻を開きなさい」

彰子が命じる。

雅美が、洗場に肩を付けて頭と肩で体重を支え、両手を後ろに回し、二つの尻房の狭間に掛ける。

「何度言わすの、早く」

躊躇する雅美に彰子の声が飛ぶ。

雅美が、自らの尻を引裂くかのように大きく開き、その狭間の二つの箇所を彰子の目に晒す。

彰子が再び風呂桶の湯をその狭間に浴びせかける。

雅美の股間から覗く陰毛が濡れ、湯によつて束ねられたその先端から湯がしたたり落ちる。

彰子が片手で石鹸を取り、雅美の尻の前に膝を付く。目が目の雅美の秘めた箇所を探るように覗き込んだ。

「この前、剃ってあげてから随分経ったわね……無駄毛がいっぱいだよ」

雅美が、その言葉を聞いた途端、彰子の視線の中の、雅美の秘部が湯とは別の熱い潤いを滲ませはじめる。

石鹸を充分にまぶした彰子の手が、雅美の尻の狭間に触れる。低く声を上げた雅美が一瞬身を引くが、すぐにその身体を戻す。

彰子の石鹸を塗るその手付きは、既にはつきりとした愛撫であった。

薔薇の香料が混ぜられた石鹸は豊かに泡立ち、そして清潔で香しい匂いを放った。しかし、その石鹸の白い泡の中の彰子の手は、雅美の体温よりも暖かいぬめりをまさぐりだしていた。

彰子が、雅美の敏感な粘膜を摩り上げながら、からかう口調で言った。

「嫌らしい娘ね……石鹸がいらぬくらいよ」

彰子が手に付いた石鹸を洗い流し、剃刀を取る。

「もつといっぱいに開くのよ、あなたの大事なお肉を切ってしまうわ」

雅美が彰子のその言葉通り、知らず知らずのうちに緩んでいた手に力を入れる。尻が大きく開き、その狭間の粘膜質の部分が張りを見せる。

彰子は、その尻を押えつけるかのように手を雅美の腰に置き、剃刀の刃を尻の狭間に近づけていく。

刃が後孔のすぐ脇の、肌が粘膜に変りはじめる辺りに触れた時、雅美が小さく身を震わせた。刃のすぐ隣で、後孔の窄まりがびくりと動く。

彰子が操る剃刀の刃が、雅美の敏感な肌の表面をすつとすべり、産毛にも似た細く短い毛を剃

り上げ行く。

雅美がぞくりとする快感を覚える。

彰子が手をすべらすと、自分の秘めた部分をざっくりと切裂かれかねない危険との隣り合わせの快感。唇から長く、深い息が漏れる。

彰子は雅美が感じているだろう快感を思い、更に剃刀を動かす手の動きを緩やかにして、今でははつきりと愛液を湛えている雅美の性器を見る。

時間をかけ、雅美から快楽を引き出ながら彰子は、雅美の陰毛を剃り上げて行く。そしてその全てが終わった時、雅美は崩れるように洗場に身を横たえる。

雅美に、彰子の厳しい口調の言葉が飛んだ。

「誰が横になっても良いって言ったの！」

その彰子の口調に驚き、身体を起そうとする雅美が、尻に固く冷たい金属が押し付けられた事を感じ、身体の動きを凍り付かせた。

彰子が雅美の背中に向かって、押し殺した愉悦の混じった冷たい声で言う。

「罰よ、雅美、かつてに横になった罰よ。切裂いて上げるわ、あなたのお尻」

彰子が、雅美の尻に押し付けた剃刀に力を加える。その感触を身体で知った雅美は息を飲み、恐怖の声を上げる。

「嫌っ、そんな事止めて下さい、お願いします」

彰子が、微笑を唇の端にへばりつかせたまま、雅美の尻に押付けた剃刀をすつと下に引いた。

その感触に、雅美が喉の奥からの大きな悲鳴を上げ、恐怖に身を震わせる。自分の尻が切裂かれ、ぱっくりと傷口が開き、その内部から多量の血が溢れだし、肌と洗場とを真っ赤に染上げていく光景が目に見えぬ。

一瞬、雅美の意識が薄れ、視野が暗く霞む。

しかしその瞬間、彼女は流れ出す血と尻を切裂かれた自分の惨状を思いながら、性的な絶頂を迎える。身体がふうつと宙に舞うような感覚が生じ、そして、緩やかな眠りにも似た暗闇が彼女の視野を塞ぐ。

彰子は、雅美が絶頂を迎えたのを知り、剃刀の刃を折り畳む。だがその剃刀にも雅美の尻にも、そして洗場にも血は流れてはいなかった。彼女は刃の背を雅美の尻に当て、切裂いたかのように思わせていただけなのだった。

彰子は再び風呂桶に湯を掬い取り、雅美の身体に浴びせかける。洗場に剃り落された陰毛が流がれ、下水口に絡まる。

湯を浴びせられた事により、浅い気絶から回復した雅美がのろと身を起し、恐々に洗場に目を向ける。当然そこには血は流れていない。雅美は自分が彰子に欺かれていた事に気付く。

「自分の尻が切られたと思っただけで気をやっってしまうのね、あなたは。本当にあなたって嫌ら

しい娘……」

その言葉とは裏腹の感情が、その彰子の言葉には込められていた。

彰子は雅美の顎を掴み、唇をよせ、奪う。舌が絡みあう。

「さあ、今度は私のを……」

彰子が、剃刀と石鹸を雅美に向かって差し出す。雅美がそれを受け取ると、彼女は洗場に大きく脚を開いた格好で座り、膝を立て、陰毛の陰りを湛える下腹部を雅美に向かって突き出す。

彰子の手が、湯に濡れた自分の陰毛をかき分ける。

「剃って……」

雅美が肯く。

雅美は、彰子の下腹部の毛を剃り上げ、そして自分がそうされたように、内股と後孔付近の産毛までを完全に除去する。

その間彰子は、次第につのる快楽に耐え、低く、そして早く息をついていた。

雅美は剃り終えた後も、彰子のように湯を浴びせかけるような事はせず、濡らした手でその表面を丹念に拭き取って行く。

彰子の下腹部が、幼女のそのような形態を呈した時、彰子は自分の、はっきりと欲情の蜜を湛えた秘部に手を掛け、開いた。

「舐めて……雅美」

雅美が、彰子のそれと同じ様な欲情に濁った目を向け、そして洗場に膝を付き、低く身を落す。顔が下腹部に触れようとした時、彰子はその頭を押え、引き止める。

「舐める所を見せるの……。舌をお出し」

雅美は、両手を彰子の腰に当て、真近の濡れた性器に向かって舌を伸ばす。

舌が彰子の肉襞を割り、その溝に沿って、すつと舐め上げる。彰子が声を漏らすと、雅美の舌の動きが早くなった。

彰子は、自分の秘部をかきわけ、舐め回す雅美の舌の動きを見詰め、その淫らさと、雅美の舌が生み出す快楽を味わう。舌が細い白濁した粘液の糸を引き始めた頃、彰子は更に大きく股を広げ、両手で自分の肉襞を押し広げ、腰を突出す。

「中に入れて、舌で中をかき回すの……」

雅美が顔を彰子の下腹部に密着させ、舌を深く差し入れる。

雅美が、彰子の中に挿入した舌をくねらせ、膣の表面を擦り上げると、彰子は大きく喘ぎ声を上げた。

彰子が手を後ろに回し、尻の狭間を探る。中指と人差し指が後孔を捉え、えぐり込むようにその中に差し込まれた。

指が前の部分で蠢く雅美の舌と同調するようにくねりはじめ、立てた膝が細かく痙攣する。息が荒くなっていく。

雅美の舌が、濡れた音をたてはじめる。

彰子は、絶頂を迎える一瞬前に自分から腰を引き、秘部から雅美の顔を離す。

「今度は後ろよ……」

そう言った彰子が膝で這い、背中を雅美に向けて尻を突き出す。

雅美が、両手で柔らかな彰子の尻の肉を掴み、開いて、その白い肉の狭間で快樂の期待に窄まりを引きつかせている後孔に向かって顔を近づけて行く。

彰子が、後孔に雅美の舌を感じ、押し分けられるような感触とともに舌が差し込まれた時、両手で自分の秘部を愛撫しはじめ。

片手の三本の指が起立した陰核を掴まみ、もう一方の手の指が膣口周辺を摩り上げる。愛液が指を濡らし、ぬめる。

差し込まれた雅美の舌が伸び、彰子の中の快樂の箇所に触れはじめたとき、彰子が膣口周辺を愛撫していた手の指を揃えて、親指以外の四本の指を膣口に押し当てる。筋肉が抵抗し、充実感にも似た感触が生れる。

彰子が膣の浅い所を指で刺激する。雅美の舌が蠢き、その感触が薄い肉の壁を通して感じられる。中断されていた快樂が戻り、昂ぶる。

彰子はその絶頂の瞬間、前方の窓に填められた磨りガラスを濡らす雨滴の動きを目に収める。

絞り出すような快樂の叫びが風呂場に響いた。

以下、次回へ